

臨時災害放送局による ICT 活用 --臨時災害放送局「りんごラジオ」のケースから--

松本 早野香[†]

サイバー大学 IT 総合学部[†]

1. はじめに

東日本大震災の被災直後、また復興期においても、メディアの果たす役割がさまざまに論じられた。マスコミュニケーションに関するもの 1)、ウェブ上のメディアに関するもの 2)が多く、後者ではとくにソーシャルメディアの役割に注目が集まった。メディアを実現する技術のなかでも ICT への注目が高かったといえよう。

震災後に注目されたメディアの一つに、臨時災害放送局がある。東日本大震災後には被災各地で計 30 局の臨時災害放送局が開局された。臨時災害放送局とは、放送法第 8 条・放送法施行規則第 7 条第 2 項第 2 号による「暴風、豪雨、洪水、地震、大規模な火事その他による災害が発生した場合に、その被害を軽減するために役立つこと」を目的とする放送を行う放送局を指す。これらにも注目が集まり、震災後 3 年を経て、技術的な側面からの研究報告、個別の事例報告、30 局を概観してのまとめ 4) などがおこなわれている。

震災から四年目となった現在も、この臨時災害放送局の多くが放送を継続している。本稿ではこの臨時災害放送局による ICT の利用について、宮城県亘理郡山元町の臨時災害放送局「りんごラジオ」をケースとして考察する。

2. 東日本大震災後の臨時災害放送局

市村 (2013) による臨時災害放送局 30 局に関する調査をみると、コミュニティ放送局から移行して開設されたものが 10 局、震災後に誕生した新規の災害臨時放送局が 20 局である。うち、2013 年 11 月調査時点で継続しているものは 15 局、コミュニティ放送局に戻ったもの 3 局である 4)。開局数・継続性ともに異例の事態である。継続中の臨時災害放送局の典型的な放送内容としては、1 日 3, 4 回、地域の行政情報やイベント情報を流し、残りは地域の昔話や音楽を流すというものである。なかには繰り返し行政情報を流し、役場の広報誌の中から記事を拾い読みするのみ、といった放送で震災後四年目を迎えている局もある。これらについては地域メディア

アとしての役割を終えかけていると考える。

しかしながら、なかには豊富なコンテンツを有し多くのリスナーを獲得している臨時災害放送局が存在する。たとえば、南相馬市の「ひばりエフエム」では、一日三回生放送をし、それとは別に一日一回放射線モニタリング情報を出し、作家による番組・地域の民謡・住民のトーク番組などのオリジナルコンテンツを制作している。その他は全国の協力者から使用許諾を得た番組を放送しており、娯楽情報を織り交ぜて必要な情報を提供し続けようという意図があることが伺える。震災によるコミュニティのダメージへの対応という点で象徴的な例は、福島県富岡町「とみおか災害エフエム」である。この放送局は本来の「富岡町」ではなく郡山市の仮設住宅から放送している。全町民が原発事故の影響で全員避難中であるためである。

3. 山元町災害臨時 FM「りんごラジオ」による ICT 活用

宮城県亘理郡山元町「りんごラジオ」ではいづれの例とも異なり、すべてオリジナルのコンテンツを、すべて町内で作成して放送を継続し、地域コミュニティでの高い知名度と支持を得ている (学術的な調査はおこなわれていないが、町内のお祭りの場で尋ねるといった町の調査によると知名度はほぼ 100%、もっとも多い聴取頻度は週に 2, 3 日であるという)。前項の例と比較すると、臨時災害放送局において、こうした番組編成・番組制作はきわめて異例であることがわかる。毎日の放送は「サイマルラジオ」により全国で聴取可能であり、局長へのインタビューにより、被災後まもないころから町外避難者の聴取を意識していたことがわかっている。臨時災害放送局は災害対応メディアであると同時にコミュニティメディアであるが、この「コミュニティ」のメンバがやむなく土地を離れることがあるという事態であり、それを ICT で補っているといえよう。

また、りんごラジオは被災後わずか十日目に放送を開始し、本書入稿現在に至るまで放送を

継続している。被災の約二週間後からブログ (<http://ringo-radio.cocolog-nifty.com/>) を運営しており、2014年6月現在、累計50万ユーザ数を誇る人気ブログに成長した。

放送とブログの運営方法やそれぞれのメディアで伝える内容については、元テレビアナウンサーである局長が明確な戦略をもってコントロールしていることが、筆者のインタビューに対して明言されている³⁾。このインタビューでの局長の発言からは、音声メディア・フロー情報であるラジオに対し、テキスト・画像を扱うことができ、ストック情報であるブログを補完的に使用していることが見て取れる。ブログはもともと、社会情報学会災害情報支援チーム³⁾の支援のもと作成されたものであったが、運用方針などは支援者からは示されておらず、りんごラジオ側の意思によって決定された。さらに、講演・対談⁵⁾といった機会も、支援の獲得のみならず町内での信頼性確保に役立つとして「一番は放送、二番はブログ、三番目が講演や取材」と位置づけている。

4. ブログの3つの役割

第一の役割は放送記録である。もっとも詳しい放送記録は手書きのノートとして局内に保存されているが、ブログにもコーナー名が毎日アップロードされている。例として2014年6月24日の番組表を以下に示す。

- ・ ありがとう！りんごラジオです
- ・ 山元町の情報、天気予報、りんごの唄
- ・ 健康一番！ ロコモ・ロコトレ・ダンベル体操
- ・ ”こち山” こちら山元町駐在所通信
- ・ らじでん！まるごと情報 山元町の情報をまるごとお届けします
- ・ すみずみ中継 町内2箇所から中継します
- ・ 災害公営戸建て住宅の申し込みについて
- ・ やまもとヴォイス 山元町ふるさと歴史学習課意が年3回発行している” 邑史随筆集” 第17号～ 鎌田一男編集長
- ・ 学校・保育所・幼稚園だより 山下第二小学校

ラジオ放送自体はフローのメディアであるが、ストックされている情報も存在する。放送の録音自体は容易に用いられる方式でのデジタルデータ化はされていないが、他団体の支援により、一時期「文字化りんごラジオ」として番組の内

容がテキストに起こされていた。

ブログの第二の役割は放送されていない記述による放送の補完である。番組表以外のブログコンテンツと放送内容は、少数の例外を除き別物である。これは明確なメディア戦略に基づくものであることが局長へのインタビューで明言されている。データの性質としては、写真が多く、日付等のメタデータがついたデジタルデータであることから、取り出し・加工が容易である。

5. 考察— 記録の地域還元

臨時災害放送局をふくむコミュニティ放送は地域住民に消費されるフロー情報であるが、同時に、ストックされれば地域の記録として機能すると筆者は考える。りんごラジオ開局時の第一声は「山元町のみなさま、こんにちは。こちらはりんごラジオです。山元町のみなさまに、山元町の情報をお伝えするために、今、放送を開始しました」であった。この姿勢が貫かれた放送内容であるからこそ、地域の記録が蓄積され、他に類を見ない被災・復興の記録として成立していると考えられる。臨時災害放送局の地域での役割はもちろん放送であり、臨時というからには遠からず終了する。しかしながら、りんごラジオのようなケースでは放送終了イコール役割の終了とはいえず、蓄積された被災と復興の記録を新たに編纂して地域に還元することもまた、役割として期待される。このとき、ICTの活用は有益というよりむしろ必須であろう。

参考文献

- 1) 丹羽美之、藤田真文 (2013) 『メディアが震えた：テレビ・ラジオと東日本大震災』。
- 2) 安田雪 (2013) 「ソーシャルメディア上の情報拡散の特性：東日本大震災時のデマの事例とハブの役割」関西大学社会学部紀要 45(1), 33-46.
- 3) 柴田邦臣、吉田寛、服部哲、松本早野香 (2014)：『「思い出」をつなぐネットワーク』第4章「地域の中でITを生かす」。
- 4) 吉岡至ほか (2014)：『地域社会と情報環境の変容』, 市村元, 第5章「被災地メディアとしての臨時災害放送局」。

Practical Use of ICT By A Case Study of “Ringo Radio”
 †Sayaka MASTUMOTO, Cyber University of Information
 Technology and Business